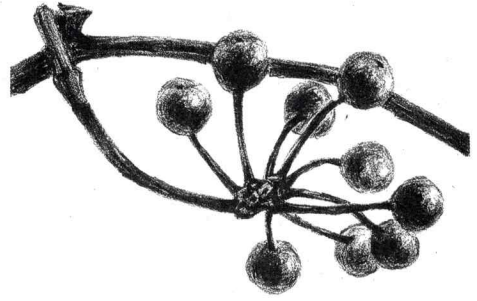


朝日歌壇俳壇



〈サンキライV〉 日高理恵子

◆長谷川 權選

- 人間を喰ふ国一つ去年今年
 (松本市) 田中 薫
 一枚の玻璃に賜る大小春
 (伊万里市) 田中 南
 ☆どこかが掘られている寒い東京
 (熊本市) 右田 捷明
 秋葉や遺体を運ぶ白き布
 (東京都) 日出嶋昭男
 煎餅を踏みしと紛ふ大落葉
 (市川市) 杉田 学
 山眠るひもじくへて熊眠られず
 (富士宮市) 渡邊 春生
 白煙の立つ金剛や雪の富士
 (船橋市) 斉木 直哉
 舞鶴といふ美しき名の町に冬
 (大阪市) 眞砂 卓三
 なんと鴨熟柿を抱きて落ちてにけり
 (下関市) 清水 幽人
 雪女どれも男の死ぬ話
 (境港市) 大谷 和三

【評】一席。人の集まりである組織は痛みを感じない。そんな国もある。二席。一枚張りの大きなガラス戸。みごとに小春日。三席。いつも掘っては埋めている東京。十句目。愛されて死ぬ男も哀しいが、男を死なす雪女も哀しい。

◆大串 章選

- 星月夜酔ひて見知らぬ駅に立つ
 (宝塚市) 吉田 賢一
 夢の続き明日に続けと布団干す
 (相模原市) はやし 央
 父の畑継いで勤労感謝の日
 (仙台市) 柿坂 伸子
 やがて住む墓地公園の曼珠沙華
 (浦安市) 逆瀬川次郎
 花野にも都会と過疎のあるやうな
 (富士市) 蒲 康裕
 日々歩く米寿にけふの寒さかな
 (下関市) 野崎 薫
 監から海風のかたち攪み取る
 (北本市) 萩原 行博
 この畑(こし)限り(と)大根引く
 (東京都) 金子 文衛
 龍に見え鯨にも見え冬の雲
 (松阪市) 石井 治
 父母も近き実家も失せて冬来る
 (東京都) 野口 嘉彦

【評】第1句。植木等の「スーダラ節」(♪チョイト一杯のつもりで飲んで～)を思い出す。第2句。「明日に続けと」が前向きで好い。楽しい夢が見られるでしょう。第3句。父の仕事を引き継いで畑仕事に励む。「勤労感謝の日」が効いている。

◆高山れおな選

- 青龍の銀の目玉やいなづまのび
 (東大阪市) 宗本 智之
 パチンコに負けて焚火へくははりぬ
 (苫小牧市) 齊藤まさし
 竹馬をドン・キホーテに探したる
 (川越市) 渡邊 隆
 川底に木の実散らばる被爆川
 (長崎市) 佐々木光博
 推しにおす地物地魚神の留守
 (金沢市) 前 九疑
 木の葉髪わたしはどんな一樹たろう
 (大和市) 澤田 睦子
 天界に待つ人増えて冬銀河
 (加古川市) 森木 史子
 熊撃ちの独語はそりと止り木に
 (矢板市) 菊地 壽一
 ☆どこかが掘られている寒い東京
 (熊本市) 右田 捷明
 ラグビーの独走誰も止められず
 (相模原市) 今井 雅裕

【評】宗本さん。いなづまのびは稲妻の事。稲妻の喩えに龍を持ち出すのは平凡だが、目玉のクローズアップで生きた。齊藤さん。パチンコと焚火の取合せのリアリティ。渡邊さん。瘦馬に跨った騎士の名を冠した驚安の殿堂で、馬ならぬ竹馬を。

◆小林貴子選

- 両端は雪の吹き込む市場かな
 (東京都) 竹内宗一郎
 紙の世はインキの匂ひ冬落暁
 (あきる野市) 松宮 明香
 鼻の判事のやうな構へかな
 (海安市) 楠木たけし
 犀の如独り行けどや冬安居
 (神戸市) 楠本いち子
 俳人の少女女天高し
 (長野県川上村) 丸山 志保
 ファスナーの言ふこと聞かぬ古ジャンパー
 (中間市) 升水恵美子
 威勢よきホースの水が掘る蓮根
 (群馬県みなかみ町) 長浜 利子
 トーストのバター動かぬ冬の朝
 (いわき市) 岡田 木花
 最後まで父の抱みし羽蒲団
 (川越市) 渡邊 隆
 まさに今と機を敏にして鷹柱
 (札幌市) 堺 久子

【評】一句目、屋根があるだけの吹きさらし、厳しい自然に美味な食材。二句目の紙の手ざわりとインキの匂い。時代遅れと言わずこれからも楽しもう。三句目、他の鳥と異なる鼻らしさを表現し、「構へ」が良い。四句目の犀の孤独もすごい。

うたをよむ 「南風」の美点

權 未知子

俳句結社「南風」が九十周年を迎えた。砂丘灼けつひにひとりの影尖る

山口草堂は昭和八年、大阪で「南風」を創刊した。戦前戦後の苦難の中で「生きる証の俳句」を標榜した。

滝となる前のしづけさ藤映す
 草堂の晩年を助け、のちに主宰を継承した七菜子。ごく端正な作風であり、一句一句が正確に読者のもとに届く。

津川絵理子
 あをぞらをしづかにながす冬木かな
 現顧問の津川絵理子、現主宰の村上朝彦の作品より。二人とも、俳壇において

咳をして死のうばしさわが身より
 のちに、七菜子に代わり主宰となった樹英雄。晩年の作品の艶は、みごとであった。

見えさうな金木犀の香なりけり
 見えさうな金木犀の香なりけり
 津川絵理子
 村上朝彦
 産に陥らなかつたのである。

とても若い。絵理子の、俳句を選んだというよりも俳句の神様に選ばれた感のある作品群が眩しい。そして、朝彦の都市生活者としての視点や社会性をあわせもつた抒情が美しい。

「南風」の美点は、歴史がありながら、主宰の継承が血縁ではないことにある。そのときどきの主宰が各自の作風を展開させながら、弟子の育成に力を入れてきた。これは現俳壇において稀有であり、特筆すべきこと。世襲制がともすれば直面する危うさ、つまり句の縮小再生産に陥らなかつたのである。

(群書 共同代表、俳人)

第35回歌壇賞 東京都の早月くらさん(31)の「ハーフ・プリズム」(30首)に決まった。本阿弥書店の「歌壇」誌の新人賞にあたる。我妻俊樹・平岡直子著「起きられない朝のための短歌入門」対談形式で「最初の一首」の作り方やスランブの乗り越え方、わからない歌、などのテーマを掘り下げ、歌の作り手、読み手を支える入門書。(書肆侃侃房・1870円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほうが1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 朝日歌壇編集部私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

風信